

C—2 家具の扱いやすさに関する人間工学的研究
—把持部の大きさと引上げ力との
関係について—

佐世保女学院短大 ○太田 昌子
奈良女大家政 花園 利昌

1. 家具類は本来の機能が果たされることのほかに、家庭管理の立場からその「扱いやすさ」についても検討を加えることが必要と思われる。家具の扱いやすさは、種々の条件によって規定されるものであるが、中でも人間が手で把持する部分の形状や材質などが特に大きな影響を持つものと思われるので、この把持部の大きさと引上げ力との関係を人間工学的に観察してみた。

2. 把持部の大きさとしては、その厚さをとり上げ、1 cmから16cm（把持し得る最大厚）までを1 cm刻みにとり、16とおりのプリント合板で作った箱型のものを試片とした。18～19歳女子6名を被検者として、この把持試片を右片手で上方に引上げる時の最大力および把持し続け得る時間を測定した。また普通の把手による引上げ力の測定、握力の測定、手の大きさの測定、実験時の手指の状態の観察などをあわせ行ない、さらに被検者のフィージングをききとり、これらと引上げ力との関係を考察した。

3. 今回の実験用把持試片はプリント合板で作った一種のみではあったが、それでも把持部の大きさの変化に伴う引上げ力および把持し得る時間の変化を明らかにすることができた。またこれらの変化の原因を種々の資料により考察することによって、持ちやすさということの

道本志卷之四
志解明
志解明
志解明